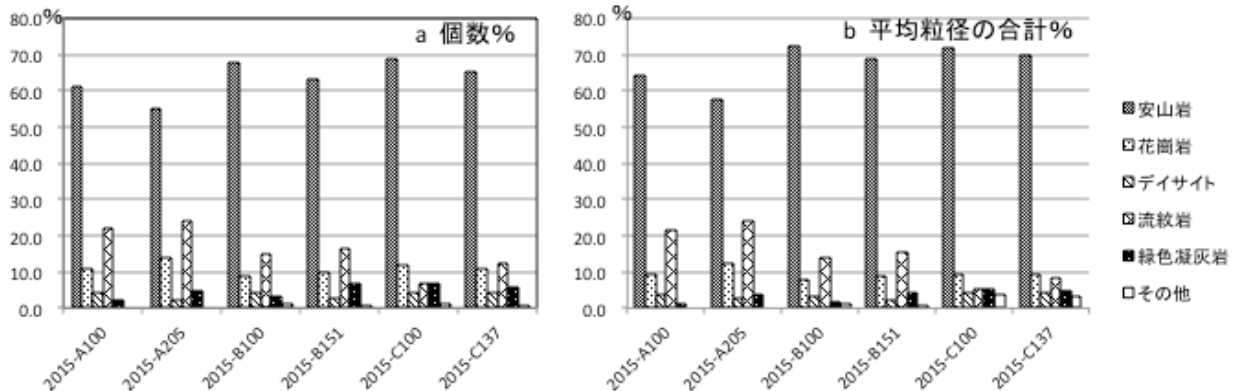


第2図 2012, 2014, 2015年の個数 (a) および平均粒径の合計 (b) による礫種組成結果. (横軸は左から2012年1mグリッドA, 同グリッドB, 3mグリッドC, 16mライン, 2014年16mライン, 2015年1mグリッドA, B, C)



第3図 2015年のABCグリッドの個数を増やした場合と100個の場合の礫種組成結果の比較.

### 3. 結果

第1表および第2図に、個数および平均粒径の合計から求めた礫種組成を示す。2012年と2014年の線方式調査による礫種組成は菊地ほか(2014)で述べているように、河川改修後に堆積した河床礫の礫種組成は改修前とあまり変化がなかったと考えられる。一方、面方式による調査からは、1mの範囲では河床の礫種ごとの分布が不均質であることが2012年と2015年の調査、特に安山岩や流紋岩において顕著である。

今回は面方式調査で、1mグリッドの採取礫を100個採取したのちに、グリッド内に残った礫(粒径がだいたい2cm以上)をさらに採取した(Aグリッドは205個, Bグリッドは151個, Cグリッドは137個)結果を比較したものを第3図に示す。採取礫数が増えた結果、不均質さはさらに大きくなったように見える。より小さい礫を採取することで、小さい礫の多い流紋岩, デイサイト, 緑色安山岩の割合が増加することによって考えられる。

河床礫の礫種組成の調査としては、局所的な不均質分布の影響の少ない、線方式の調査が有効であることが今回の調査でも確認できた。このことから、2012年の河川改修前後の礫種組成の変化は、線方式調査を元にする、ほとんど見られないと考えられる。

#### 引用文献

- 角 靖夫 (1966) 地質ニュース, no. 145, 36-42.      角 靖夫 (1967) 地質ニュース, no. 151, 26-35.  
 立石雅昭・徐 垣 (1998) 新版碎屑物の研究法. 地学団体研究会, 101-146. 奥山ほか(2011)地団研第65回総会要旨集, 85.  
 大友ほか(2012)第8回もがみがわ水環境発表会講演要旨集, 49-50. 大友ほか(2013)地団研第67回総会要旨集, 138.  
 菊池ほか(2014)地団研第68回総会要旨集, 10.